

## 序章 既往の調査と調査体制の推移

### 第1節 既往の調査

#### 1 概要

1997年（平成9年）12月現在、徳島市庄・蔵本遺跡（徳島市庄遺跡の徳島大学構内部分）に対して実施された埋蔵文化財発掘調査は通算で15件を数える。これらを実施年度の古い順に1次調査から15次調査と呼ぶことにする。最初の第1次調査は1982年（昭和57年度）に行われた体育館器具庫建設予定地の発掘調査であり、本学からの委嘱を受けて徳島県教育委員会が実施した。その後、第5次までの数件の調査は引き続き県教育委員会の担当のもとに実施されたが、第6次調査となる1986年（昭和61年度）の青藍会館建設予定地の調査の際には、本学の責任において発掘調査を実施する方向が初めて模索されることとなり、医学部内に同窓会館建設予定地埋蔵文化財保護対策検討委員会を設置するとともに、専門職員を医学部付の非常勤職員枠で採用し、調査員に任ずる措置が講じられた。

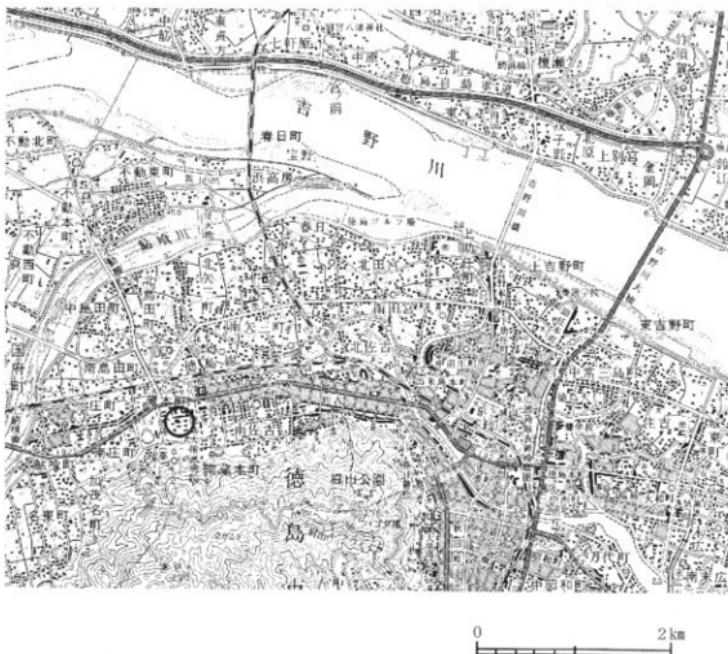


図1 徳島市庄・蔵本遺跡の位置

表1 既往の調査一覧

調査名	調査実施年 (年度)	調査地点	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査期間	調査主体	担当者	遺構 面数
第1次調査	1982年 (昭和57年度)	体育館器具庫	147	12月?1月中旬 (2ヶ月)	徳島県教委	福家清司 久保脇美朗	3面
第2次調査	1983年 (昭和58年度)	体育館	1,160	1月中旬?11月30日 (10ヶ月)	徳島県教委	福家清司 久保脇美朗	3面
第3次調査	1984年 (昭和59年度)	活動供用施設	157	7月3日?8月10日 (1ヶ月)	徳島県教委	福家清司 久保脇美朗	3面
第4次調査	1985年 (昭和60年度)	医学部臨床講義棟	655	4月25日?7月15日 (3ヶ月)	徳島県教委	松永住美 大谷泰久	3面
第5次調査	1985年 (昭和60年度)	動物実験施設	1,321	9月2日?12月28日 (4ヶ月)	徳島県教委	松永住美 大谷泰久	2面
第6次調査	1986年 (昭和61年度)	青藍会館	540	12月11日?3月20日 (3ヶ月)	徳島大学	河野雄次 森清治ほか	2面
第7次調査	1987年 (昭和62年度)	医療技術短期大学 校舎	870	4月1日?7月31日 (4ヶ月)	徳島県教委	羽山久男 久保脇美朗	3面
第8次調査	1990年 (平成元年度)	長井記念ホール・ 薬学部実験研究棟	1,430	1月11日?2月28日 (1ヶ月)	徳島大学	岡内三眞 桑原久男	検出 せず
第9次調査	1992年 (平成4年度)	医療技術短期大学 校舎増築	310	7月11日?9月4日 (3ヶ月)	徳島大学	東潮 北條芳隆	4面
第10次調査	1993年 (平成5年度)	酵素科学研究セン ター	623	5月26日?9月30日 (4ヶ月)	徳島大学	東潮 北條芳隆	4面
第11次調査	1994年 (平成5年度)	MI・CT棟	224	2月18日?3月17日 (1ヶ月)	徳島大学	東潮 北條芳隆	2面
第12次調査	1994年 (平成5年度)	付属図書館蔵本分 館増築	288	2月25日?3月24日 (1ヶ月)	徳島大学	東潮 北條芳隆	2面
第13次調査	1995・1996年(平 成7・8年度)	病棟I期	5,000	3月27日?3月31日 (1ヶ月) 4月1日?7月31日 (4ヶ月)	徳島大学	東潮 北條芳隆	4面
第14次調査	1995年 (平成7年度)	医薬資源教育研究 センター	300	6月21日?9月5日 (3ヶ月)	徳島大学	東潮 橋本達也	3面
第15次調査	1996年・1997年 (平成8・9年度)	共同溝	2,000	11月1日?3月31日 (3ヶ月) 4月1日?6月7日 (2ヶ月)	徳島大学	北條芳隆 橋本達也 中村 豊	3面

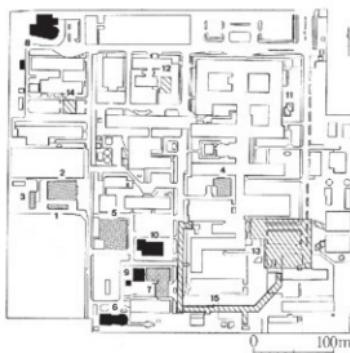


図2 既往の調査位置図

しかしこうした措置が恒常的な調査組織の設置へと向かうにはいたらず、翌年に実施された医療技術短期大学校舎新営予定地での第7次調査に際しては、再度県教育委員会に発掘調査を委嘱することになった。ただし、このような変則的な対応を問題視する学内世論を受け、1990年（平成元年度）に実施された長井記念ホール建設予定地での試掘調査、および翌年に実施された薬学部実験研究棟建設に先立つ試掘調査（第8次調査）にあたっては、薬学部内に調査主体および責任母体組織としての文化財保護対策委員会を应急的処置として設置し、岡内三真総合科学部教授が調査を担当した。

上記のような経緯を経た後、1992年（平成4年）には徳島大学埋蔵文化財調査委員会および埋蔵文化財調査室が設置される方向へと向かい、同年4月には同委員会および同調査室が設置された。こうした動きの背景には、医学部および同附属病院の老朽化に伴う再開発の必要性が現実化しつつあったことや、当該地区が弥生時代を中心とした第1級の遺跡であり、埋蔵文化財の取り扱いにかかる抜本的な体制整備の必要性が周知されたことなどがあげられる。この間の学内における合意の形成にあたり、総合科学部の歴史学系教官の果たした役割は大きい。

埋蔵文化財調査室の設置以後は、本学校地内遺跡の調査を原則的に本調査室が担うこととなり、再開発の本格化に伴って、これまでに7件の調査を実施してきた。もっとも最近の調査は、1997年6月に終了した共同溝敷設予定地の埋蔵文化財発掘調査（第15次調査）である。

これら1982年から1997年までの足かけ15年間にわたる15件の発掘調査を列挙したものが表1である。調査主体の如何を問わず年次ごとに整理した。第1次調査から第5次調査までと第7次調査の通算6件が徳島県教育委員会による発掘調査であり、その他は徳島大学実施分の調査である。また各調査地点は図2に示したとおりである。

## 2 既往の調査成果

第1次・第2次調査では体育館およびその隣接地が調査された。主要な検出遺構としては、条里閑連施設の可能性の高い大小の水路や平安時代の木棺墓、古墳時代の4棟の住居跡、井戸、弥生時代前期の土坑や土器溜りなどがある。また遺物としては各時代の土器類、石器類が豊富であるが、木製品にも注目すべき資料が含まれている。特に畜串、人形、木簡などが墨書き器類とともに発見されたことは特筆すべき成果であり、平安時代における公共的施設の存在が近接地帯において推定される端緒を開いた。



図3 体育館地点



図4 動物実験施設地点



図5 病棟地点(左)と共同溝地点(右)

また包含層中からの出土ではあるが、2箇所に穿孔を施した破鏡が発見され、注目を集めた。鏡式は後漢鏡の斜線二神二獸鏡であろうと推定されている。

この調査によって、庄・蔵本遺跡の遺構面の概要は大筋で把握され、各時代・各時期にわたる遺構の調査方針としては、全体を3枚の遺構面として処理しうることが判明した。なおこの調査にあたっては、遺構密度が高く、当初の計画を単年度の予算では消化しえないことが判明し、契約変更を経て2ヶ年度にわたることとなった。なお引き続き実施された3次調査は、2次調査地点の西側の地点の調査であった。

4次調査は附属病院地区の臨床講義棟建設に先だって実施された。本地点発見の明確な遺構としては杭列がある。ただし全体としてみた場合、調査地点は遺構密度の希薄な場所であつたらしい。遺物量も少なかったようである。

庄・蔵本遺跡の調査史において特記すべき成果の上がったのは次の第5次調査である。動物実験施設の建設予定地で実施された調査であるが、ここでは弥生時代前期から後期にかけての大規模な流路跡が検出され、多量の遺物が出土した。土器類、石器類、木器類のどれをとっても、本県下の弥生文化を考えるうえできわめて重要な意味をもつものが多い。特に水銀朱加工用の石杵や木杵などは、本地域の弥生文化を特徴づけ、続く古墳時代祭祀の原型を物語る資料として貴重である。正式報告書の早期刊行が切望されるところである。

第6次調査は青藍会館建設に伴って実施された。この調査では弥生時代前期の集団墓が発見され、各方面から注目された。本次の調査成果については第2章で正式報告の責を果たしたい。

第7次調査は医療技術短期大学校舎地点の調査であり、弥生時代前期後半の資料を中心に各時代の遺構が検出されている。弥生時代前期後半から末にかけての土坑がまとまって発見され、このなかには墓と認定しうるものも含まれている。古墳時代の区画溝が発見されたことも貴重な成果であり、滑石製の模造品類が出土した。

第8次調査は薬学部地区の長井記念ホールおよび薬学部実験研究棟の建設に先立つ試掘調査である。本次調査結果についても第3章で報告する。

第9次調査は医療技術短期大学校舎増築地点で実施された。弥生時代前期の流路が検出され、腰掛けをはじめとする当該時期の資料が出土した。本調査の成果については第4章で報告する。

第10次調査は酵素科学研究センター地点の調査である。弥生時代前期の灌溉用水路、弥生時代中期の土坑や溝、古墳時代の住居跡や井戸などが発見された。本調査成果については第5章で詳細を報告する。

第11次調査はMRI・CT 棟地点の調査である。この調査における検出遺構・遺物はごくわずかで、唯一弥生時代終末期の溝が1条検出されたにとどまる。遺跡の北側の境界を推定する際に有効な資料となる。

第12次調査は附属図書館の増築地点で実施された。近世の条里区画溝や中世の溝、弥生時代の流路などを検出した。第11次調査と同様、遺物の数量は比較的少ない。

第13次調査は病棟建築予定地での調査である。現時点では本遺跡におけるもっとも広大な面積を対象とした発掘調査であり、条里区画溝、弥生時代後期および終末期の住居跡、溝、埋葬、弥生時代中期の方形周溝墓、弥生時代前期の灌溉用水路や土坑、住居跡など多数の遺構・遺物を検出した。特に注目されたのが弥生時代前期の大規模灌漑施設の確認であり、本地域における稲作農耕の開始期には、従来の予想を越える高水準の土木技術と労働力が備わっていたことが判明した。

第14次調査は薬学部地区における医薬資源研究センター地点の調査である。弥生時代から古墳時代の溝や土坑などが検出された。ただし遺物の出土量は少なかった。本地点も遺跡の北限に近い場所であろうと思われる。

第15次調査は病棟に付設する共同溝地点の調査である。本調査によって蔵本地区の東半部については、東西方向に長大なトレンチを掘削したのと等しい状態となり、遺跡の粗密の状況や地形の概要が的確に把握されることとなった。各時代にわたる多数の遺構・遺物が検出されたが、なかでも弥生時代前期の環濠集落の発見は重要な成果である。調査の結果判明した当該期の集落の中心部は、はからずも埋蔵文化財調査室の所在する看護婦宿舎周辺の一帯である。

上記の諸成果を概観してみると、やはり弥生時代前期を中心として注目すべき成果がえられていることがわかる。東四国地域の弥生時代前期を代表する遺跡というふうにふさわしい。それだけにまた、累積した膨大な資料に対する整理作業、正式報告書の刊行と、資料公開が急がれるところである。

## 第2節 徳島大学埋蔵文化財調査委員会・同調査室の設置

### 1 委員会規則と調査室要項の策定

上述のように、庄・蔵本遺跡に対する埋蔵文化財の発掘調査については、その対処の方式が一定しなかったために紆余曲折を経ることになったが、1990年代以降は本学の責任において実施する方向性が明確化されるとともに調査体制は抜本的に改善され、新たな段階を迎えた。

埋蔵文化財調査委員会（委員長 武田克之学長）の設置が確定したのは1992年（平成4年）春であり、武田克之委員長を議長とし、その第1回の会議は平成4年3月17日に開催された。この会議で委員会規則が策定され、同年4月27日には埋蔵文化財調査室要項が制定された。室長には東潮総合科学部助教授が任命された。

徳島大学埋蔵文化財調査委員会規則および埋蔵文化財調査室要項は次のとおりである。

徳島大学埋蔵文化財調査委員会規則（平成4年3月17日施行）

（設置）

第一条 徳島大学（医療技術短期大学部を含む。以下「本学」という。）に、徳島大学埋蔵文化財調査委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(所掌事項)

第二条 委員会は、本学の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する重要事項を調査審議する。

(組織)

第三条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- 一 学長
  - 二 各学部長
  - 三 附属図書館長
  - 四 各附属病院長
  - 五 医療技術短期大学部部長
  - 六 発掘調査に関連のある専門分野の教官若干人
  - 七 事務局長
  - 八 学生部長
  - 九 庶務部長、經理部長、施設部長及び学生部次長
- 2 前項第六号の委員は、学長が命ずる。
- 3 第一項第六号の委員の任期は二年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合は、これを補充し、その任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第四条 委員会に委員長を置き、学長をもって充てる。

- 2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。
- 3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員が、その職務を代理する。

(会議)

第五条 委員会は、委員の過半数の出席がなければ、会議を開くことができない。

- 2 議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
- (委員以外の者の出席)

第六条 委員会が必要と認めたときは、会議に委員以外の者の出席を求めて、説明又は意見を聞くことができる。

(調査室)

第七条 委員会に、埋蔵文化財の発掘調査に関する業務を行うため、埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。

- 2 調査室の業務、組織その他必要な事項については、別に定める。

(庶務)

第八条 委員会の庶務は、施設部企画課において処理する。

(雑則)

第九条 この規則に定めるもののほか、委員会の議事及び運営に関し必要な事項は、委員会が別に定める。

附則

この規則は、平成4年3月17日から施行する。

附則（平成5年4月1日規則第1099号改正）

この規則は、平成5年4月1日から施行する。

附則（平成5年9月17日規則第1114号改正）

この規則は、平成5年10月1日から施行する。

#### 徳島大学埋蔵文化財調査室要項（平成4年4月27日制定）

##### （趣旨）

第一条 この要項は、徳島大学埋蔵文化財調査委員会規則第7条第2項の規定に基づき、埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）の業務、組織その他必要な事項について定めるものとする。

##### （業務）

第二条 調査室は、本学の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する次の業務を行う。

- 一 実施計画の立案及び実施に関すること。
- 二 出土した埋蔵文化財の整理、保管及び保存に関すること。
- 三 報告書の作成に関すること。
- 四 その他必要な事項

##### （組織）

第三条 調査室に、室長を置く。

- 2 室長は、調査室に関する業務を掌理する。
- 3 調査室に、調査員その他必要な職員を置くことができる。
- 4 調査員は、発掘調査に関する業務を行う。
- 5 第三項の職員は、非常勤職員をもって充てることができる。

##### （室長等の任命及び任期）

第四条 室長及び調査員は、埋蔵文化調査委員会（以下「委員会」という。）の議を経て学長が任命する。

- 2 室長の任期は、委員会の議を経て学長が定める。

##### （事務）

第五条 調査室に関する事務は、関係部局の協力を得て、施設部企画課において処理する。

##### （雑則）

第六条 この要項に定めるもののほか、調査室の運営に関し必要な事項は、委員会が別に定める。

##### 附則

この要項は、平成4年4月27日から実施する。

1992年（平成4年）次の埋蔵文化財調査委員会組織は次のとおりである。

#### 埋蔵文化財調査委員会

委員長	武田 克之	学長
委 員	丸山 幸彦	総合科学部長
同	東 潮	総合科学部助教授
同	齊藤 隆雄	医学部長
同	河田 照茂	歯学部長

委 員	寺田 弘	薬学部長
同	河野 清	工学部長
同	一条 義博	教養部長
同	石躍 嶽央	教養部教授
同	後藤 健次	附属図書館長
同	井形 高明	医学部附属病院長
同	板東 永一	歯学部附属病院長
同	磯部 淳一	医療技術短期大学部長
同	林 信行	事務局長
同	黒田 定男	庶務部長
同	伊藤 良昭	経理部長
同	山紀 紀一	施設部長
同	安藝 謙嗣	学生部長
同	堀 靖之	学生部次長
庶務担当	松本喜代司	施設部企画課長
同	奥野 勝	施設部企画課企画係長
同	沖野 紘子	施設部企画課企画係主任
埋蔵文化財調査室		
室長(併任)	東 潮	総合科学部助教授
調査員	北條 芳隆	医学部助手

## 2 調査体制の整備

埋蔵文化財調査室は、医学部附属病院地区の看護婦宿舎1階に設けられて出発した。また調査員としては1名を教官身分で採用することが決定され、医学部第1解剖学講座助手をあてることになった。1992年7月に第9次調査を開始したが、調査員が採用されるまでは東潮（室長）が担当し、8月1日付けで北條芳隆が助手として採用され、調査を引き継ぐこととなった。その後、1993年には発掘調査と整理作業の円滑な実施をはかるべく補助職員を採用することとなり、非常勤職員として施設部技術補佐員1名をあてることになった。

上記の体制で第10次調査を実施した。しかし1995年以降は学内の再開発が本格化し、さらには庄・蔵本遺跡だけでなく徳島市常三島遺跡（工学部、総合科学部、附属図書館地区などを含む）の埋蔵文化財への対応も同時に必要となつたため、第13次の病棟地点の調査の際には、調査体制のさらなる整備が求められるところとなつた。こうした情勢のもと、1995年には2名目の調査員として橋本達也が助手として採用され、補助職員については、翌年にかけて技術補佐員1名の増員がはかられた。

常三島遺跡については江戸時代の武家屋敷跡であることが古くから知られていたが、古代阿波國新島莊（枚方地区）の有力な推定地にもあたる。そのため、周知の遺跡としての行政的対応の必要性が学内外から強く指摘されたこともあり、徳島県教育委員会や徳島市教育委員会との協議を経たうえで、1992

表2 常三島遺跡における既往の調査一覧

調査名	調査実施年 (年・度)	調査地点	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査期間	調査主体	担当者	遺構 面数
第1次調査	1992年 (平成4年度)	工学部自習棟試掘	160	9月10日～9月21日 (10日間)	徳島大学	東潮 北條芳隆 東潮 北條芳隆	2面
第2次調査	1993年 (平成5年度)	地域共同研究センター	576	10月1日～10月30日 (1ヶ月)	徳島大学	東潮 北條芳隆	2面
第3次調査	1995年 (平成7年度)	光応用工学科	783	8月下旬～3月24日 (2ヶ月)	徳島大学	東潮 橋本達也	3面
第4次調査	1996年 (平成7年度)	工業会館	400	12月1日～1月31日 (2ヶ月)	徳島市教委	勝浦康守	1面
第5次調査	1996年 (平成7年度)	光応用工学科?追加	165	4月14日～5月24日 (2ヶ月)	徳島大学	東潮 橋本達也	3面
第6次調査	1996年 (平成7年度)	サテライトベンチャー ビジネスラボラトリ	619	6月6日～8月10日 (2ヶ月)	徳島大学	東潮 橋本達也	2面
第7次調査	1996年 (平成7年度)	機械工学科	2,000	7月28日～11月8日 (3ヶ月)	徳島大学	北條芳隆 橋本達也 中村豊	3面
第8次調査	1997年 (平成8年度)	総合情報処理センター 等合築	687	3月28日～6月10日 (3ヶ月)	徳島大学	北條芳隆	3面

年には工学部実習棟の建設に先立つ試掘調査が埋蔵文化財調査室の担当のもとに実施された。

調査の結果、遺跡の保存状態は良好であることが確認されたので、この結果をうけて、翌年の地域共同研究センター棟建設予定地以後の発掘調査については全面調査を実施することとし、現在までに8件の調査を実施している。これらの調査については表2に示したとおりである。なお工学部工業会館地点の発掘調査については徳島市教育委員会の担当で実施されたが、それ以外は本学の埋蔵文化財調査室が担当した。

このほか、埋蔵文化財調査室では国際交流会館（北島町所在）の建設工事に先立つ試掘調査を1994年に実施し、1997年には薬学部臨海実験施設（鳴門市所在）の立会調査を行った。庄・蔭本遺跡、常三島遺跡の調査を中心に、現在では全学の埋蔵文化財調査を担う組織としての体制整備が確立されつつある。

調査体制については、工学部地区における再開発の本格化に対応すべく、1996年には3名目の調査員として中村豊が助手として採用された。補助職員についてもさらに3名の増員がはかられ、現在は技術補佐員5名の構成となっている。整理・研究室についても、職員の作業スペースや遺物の保管場所を確保すべく、1996年4月以降は看護婦宿舎の1階東側の約250m<sup>2</sup>を暫定的に使用することになった。

なお調査員の位置づけについては、1994年以降、学内の流用定員を措置することになり、所属は総合科学部と大学開放実践センターに付けられている。また1996年11月には北條芳隆助手が室長に任命されるとともに翌年4月には総合科学部助教授が発令され、現在に至っている。

1998年3月現在の埋蔵文化財調査組織は次のとおりである。

#### 埋蔵文化財調査委員会

委員長	齋藤 史郎	学長
委 員	吉森 章夫	総合科学部長
同	石踊 崑央	総合科学部教授
同	東 潮	総合科学部教授
同	北條 芳隆	総合科学部助教授
同	井形 高明	医学部長
同	佐藤 光信	歯学部長
同	渋谷 雅之	薬学部長

委 員	森吉 孝	工学部長
同	寺田 弘	附属図書館長
同	黒田 泰宏	医学部附属病院長
同	板東 永一	歯学部附属病院長
同	大西 敏夫	医療技術短期大学部長
同	山田 清	事務局長
同	山崎 繁行	庶務部長
同	太田 貢	経理部長
同	高村 輝良	施設部長
同	熊谷 正憲	学生部長
同	杉尾 紀文	学生部次長

庶務担当	神内 正行	施設部企画課長
同	奥野 勝	施設部企画課企画係長
同	沖野 鮎子	施設部企画課企画係主任

## 埋蔵文化財調査室

室長(調査員)	北條 芳隆	総合科学部助教授
調査員	橋本 達也	同 助手
同	中村 豊	大学開放実践センター助手
調査補助職員	山本 愛子	施設部技術補佐員
同	上田 淑子	同 補佐員
同	岸本多美子	同 補佐員
同	原 多賀子	同 補佐員
同	安山かおり	同 補佐員



図6 埋蔵文化財調査室